序

「宗教」といいますと、お寺や教会などが関与し、精神の修養にかかわる営為として受け止められています。それぞれ特定の世界観を提示し、その原理を明らかにすることによって、人々に、苦から解放、幸福へいたる考え方を示してきました。これは、しかし、教義のなかで指定された生活規範を守り、かつ実践することによりもたらされるとされます。

なかでも、慈悲や隣人愛をかたちに表すものとしての「施し」は、ひとしく宗教の説くところであります。言葉は違いますが、仏教であれば宗教施設の「寄進」、イスラームであれば、弱者に財を分け与える「喜捨」、キリスト教では罪をあがなうという「贖罪」は、いずれもこの行為の発現形態をさすものとなっています。財の移転によって他者に幸せを分け与えるだけでなく、自分自身にも喜びや心の平安をもたらすものとして、各宗教はこれを奨励しています。

教えの内容は必ずしも一様ではありませんが、いずれにあっても施与は重要な信仰実践としています。相互に異質な宗教として、とくに現代にあってはこれらを峻別しますが、結局は同じことを説いているように思えます。そのことを「施し」に関わる教義それぞ

れの社会経済的意味を考察することによって明らかにしたい、というのが本書の趣旨です。ここでは上座仏教、イスラーム、キリスト教が取り上げられています。

利己が利他となる仕組み

第一章では、東南アジアのエーヤーワディー川流域地方に展開した上座仏教において、その実践形態とされた寄進を題材として、これが社会の経済的格差を是正するためのものであったことが論じられます。

釈尊は、この世を苦の世界と定義し、これから解放（「解脱」）される道を示しました。具体的には五戒の遵守や、功徳を為す、などの実践です。その一形態としてエーヤーワディー川流域では、ピューの時代を経て、一一世紀にはじまるバガン時代から、津々浦々に煉瓦製の仏塔が作られ続けています。

前世・現世・来世という横軸と、地獄から天上という縦軸のなかで、自業自得なる原理が冷徹に作動する世界にあって、来世の状態を決定するのは、現世で獲得した富や名誉や家族や肉体ではなく、ただこの世で為した功徳であるとされます。しかもその多寡が来世の境遇を決定するということになれば、だれしも物に執着するより、これを功徳に変換しておきたいと思うに違いありません。仏塔や窟院の建立は、そうした世界観の産物なのです。

ここには個人の蓄財がいくつもいくつも投入されています。尽きることのない富に対する欲望が断ち切られ、これが煉瓦となって積み重なっているといってよいでしょう。これは、周辺の山地に暮らすカチンの祭り「マナオ」や、ムイン・チンの「石引き儀式」などにみられる、いわゆる「蕩尽」が、輪廻の法則を媒介することにより、より純化された作用の結果と考えることもできます。

「蕩尽」や寄進は、はからずも財の再配分と平準化を進めます。一部に集積された富は、儀礼・大祭、仏教施設の建設をとおして、関係者のもとへ再配分されます。これを縁として富を蓄積した者も、また同じことをおこなう。来世での存在を決定する、この世での功徳という観念のもとでは、必然化する現象であるといってよいでしょう。「解脱」へ向けての実践という利己的行為が、社会の格差を是正していくのです。ひたすら自分のためにとしたことが、じつは他人のためにもなっていくのです。

こうしたことはミャンマーのみならず、スリランカやタイなどの上座仏教社会にもひとしくあてはまることと思われますが、その実例を検討する前に、そもそも功徳という行為や、これを他者に「振り向ける」廻向という観念の構造はどうなっているのか、これをきちんと理解しておく必要があります。第二章では、仏教徒による実践からではなく、仏典の解釈をとおして、その内容が明らかにされます。いわゆる理論的考察です。

廻向と随喜

釈尊は幸福への道には、二種類あることを説きました。一つは修行して悟りを開く。主に出家修行者のための道です。もう一つは善行為による功徳、さらにその徳を他者に廻向してこの世でも来世でも幸福に暮らす、主に在家信者や他宗教（無宗教）者のための道。

この功徳や廻向の観念は、仏教の専売特許ではありませんでした。ただ、来世への転生を前提とするので、輪廻の観念が早くからあったインドが発祥の地であるといえましょう。バラモンたちは釈尊以前から功徳を為すこととして先祖供養を勧めていました。それは、バラモンを供養しこれに布施すること、その功徳を先祖に廻向するというものでありました。

世界の各地域で生まれた宗教や道徳観念にも、悪を離れて善行為をなすべきという共通理解が読み取れ、それが社会の秩序を保つ一因となっていました。しかしその中に、来世の観念や善行為の功徳を他者に廻向する観念を明確に規定したものはありません。来世の幸福について計算することは、現世での生き方に良い意味での縛りを与え、廻向の観念は他者の幸福にまで思いを広げることになります。

仏典には功徳廻向のしくみが、輪廻や業や心のはたらきの視点から理論づけられています。功徳は物として蓄積されるのではなく、精神の働きによって生じるものであり、

廻向もまた、功徳の一部が、廻向をする主体から、される他者に移転されるというのではありません。

廻向の指定先である他者は、指定した人の功徳を知ることによって随喜し、これが功徳となって受け手に結果する。またそのことによって、廻向をした主体にもさらなる功徳が生じることになります。このしくみが、ここでは仏典の分析によって解明されており、功徳廻向の意味が説かれています。

ただしこれは、仏教の考え方だけで成り立っている社会の話で、世界中を探してもそのようなところはどこにもありません。第一章のビルマ仏教徒の場合も、日本でもそうですが、カタカナで書く「カミ」といいますか、木に宿っているようなものとか、大きな石とか、家敷の隅にいるカミ様など、そういうものを信じて、生活をしています。それが功徳というものに、どのような関わりを持つのか、仏教の考え方とどのような関係にあるのか、という問題があります。

上座仏教と精霊祭祀をつなぐ

第三章では、精霊祭祀と仏教は相対立するものではなく、仏教徒の中では絡まりあい、全体としてこれが仏教的実践である功徳や廻向を支えていることが述べられています。精霊祭祀は仏教が伝わる以前から実践されていましたが、その後主流となった仏教がこ

れを貶めるとか、排除するとか、周縁化するというのではなく、融合し互いに支えあい、資本主義化した現代においても、形を変えつつ、仏教的生活を可能ならしめているという訳です。

つまり国や地域を問わず、上座仏教徒の宗教実践、とくに功徳を積むという行為には、共通して、精霊信仰との関わりを認めない訳にはいかないという事象が見て取れるというのです。功徳は、在家者が自ら出家すること、寺院や仏塔の造営、戒を守ることなど、法灯を継承するおこないから生じます。そしてこれは、個人の生活環境を軸としつつも、人をその外辺の世界に繋げていきます。功徳がらみの儀礼は常に他所者に開かれ、功徳の廻向を通じて他界した霊と関わっていくのです。

ところが、地域や集落の来歴と生業に直結する精霊祭祀は、多様にして個別的であります。場所によってその神格や機能、そして供犠獣や儀礼内容は一様ではありません。しかも仏教と違い、外に開かれておりません。また、そこには殺生という行為も含まれますので、仏教には周縁化されています。ただ、環境と人との相互作用、この世ならぬ霊的存在との関わりを示す点で人類共通の普遍的な実践であり、この点では仏教と変わるところがありません。

この歴史的に異なる二つの宗教をつなぐもの、すなわちこの二つの実践を矛盾なく成り立たせているものが、この章では、布施や供犠という経済的蕩尽を通しての社会的平

等の追究であるとされています。ともに名誉という見返りを伴い、国家の近代化政策や社会変化に適応しつつ変容継承されてきていますが、それぞれの様態を探ることにより、物質的にみて非経済的な出家主義の上座仏教が、なぜ今なお人々の生活に根づく宗教であり続けるのかを、理解することができると述べられています。

アッラーによる褒賞

上座仏教の場合、寄進や布施は、自業自得という法則のなかで、輪廻の苦しみから逃れる方途とされてきました。第四章ではイスラーム社会における喜捨の意味が、中央アジアのカザフスタンを中心に述べられております。

ムスリム（イスラーム教徒）にとって、喜捨は礼拝や断食とならぶ重要な信仰行為の一つとされています。喜捨の一つであるザカートは、年毎に財産の一定の割合を義務として分与するもので、国や機関が集めて生活に困窮している人などに提供するためのものです。一方、自発的な喜捨であるサダカは時期や額が定められておらず、バザールで物乞いする人に小銭をわたすこと、モスクの改増築のために寄付すること、食事を提供することなど、幅広い内容を含みます。

こうした喜捨は、人類学研究によれば、金銭や物を直接的・間接的に贈るという意味で贈与のひとつのかたちであります。ところがザカートやサダカは、通常の贈与のよう

に相手からの返礼ではなく、アッラーによる褒賞を期待しておこなわれる点が、通常の贈与と異なるところです。喜捨することで罪が浄化され、来世での報酬が増加するという宗教的観念は、多くのムスリムに共有されています。この観念に支えられ、直接的な繋がりのない相手に対してもなされうる喜捨は、社会に富を広く分配していく仕組みでもあるといってよいでしょう。

現在、世俗化した社会におけるイスラームのあり方がしばしば議論されていますが、喜捨は具体的にどのようにおこなわれているのかについて、二〇世紀になって社会主義に基づく反宗教政策と世俗化を経験した、中央アジアのカザフスタンでの人類学調査をもとに、明らかにされています。ザカートがあまり厳密に守られていない反面、サダカが広くおこなわれていることを、モスクに集まる喜捨の使途、および死者儀礼の際の喜捨や共食などをとおして検討し、現代における喜捨の意味がイスラームの世界観との関連で考察されています。

原罪と贖罪と寄進

喜捨は、一般に自己の解脱と他者への思いやりによっておこなわれるだけでなく、自己がおかした罪を悔いてなされる場合もあります。第五章では、西洋中世のキリスト教世界における、贖罪と喜捨の関係が説かれております。

魂の救済を求めて、喜捨のかたちでの功徳という思想は、地中海世界とその周縁地帯の人々が奉ずるユダヤ教、キリスト教、イスラームに共通した要素であるといってよいでしょう。こうした考え方は、かつての年代設定より遙かに古く、西暦紀元前一千年以前にイランで生まれたとされるゾロアスター教に源があります。天国と地獄の観念、肉体の復活、最後の審判などの思想とともに、これらの一神教に継承されてきました。

古代ユダヤ教から生まれたキリスト教は、魂の救済という思想を、原罪という宗教的要因と結びつけ、生の目的を贖罪にあるとし、その重要な手段として寄進・喜捨を位置づけます。持ち物を売り払って貧しいに人に施せば、天に富を積むことができるという考え方のもと、信徒個人の生前の喜捨やその他の善行などの努力によって、「最後の審判」でその魂が天国に向かうのか、それとも地獄へ転落するかが決まるというのです。

一方で、たとえば「パンとサーカス」による「蕩尽」を否定し、これを教会に寄進してこそ意味あるものとなることが説かれ、またペラギウス派による、神の恩寵ではなく個人の判断を重視する思想を異端とするなどして、この思想はしだいに定式化されていきます。その後、修道院制の確立や「終末論」の展開とともに、時代を追って、この考えは深化されていきます。同時に、贖罪という宗教的実践が、つまり罪の意識の反芻が、そしてその検証の意識が、人に個としての内面の確立に導く回路を与えたことが述べられています。

何れの宗教にあっても、精神の作用として功徳や贖罪の意味が説かれるのですが、よくよく見ていきますと、どうもそれだけではないようです。ここには財の移動、つまり再配分があり、これが社会を安定・標準化させる、今の言葉で言えば、格差をなくそうとする意図が裏に隠されているのではないかと考えざるをえません。いずれの宗教も、個人のみならず、自動的に社会を、政治的にも経済的にも安定に導くためのものでもあったようです。

正面から「これは社会のためですよ」「自分の身を捨てて、社会のために尽しなさい」というようなことではなく、まず自分のことを考えればよい。そして、自分のためと思ってやっていることが、結果的に、社会のためになっていく。どちらかと言えば取り組みやすく、自分が犠牲を払っているという感覚は全くなく、利己的行為が必然的に社会のためになっていく。そういう仕組みが、仏教やキリスト教、イスラームのような「世界宗教」には共通してあるのではないか。

こうしたことを考えつつ、最終的には自分たちが暮らしている社会の仕組みをあぶり出したい。他者との関係を規定している経済規範は、社会を安定させるためのものであるのか、それともこれを混乱に導くものとして作用しているか。社会は平準化へ向かっているのか、それとも格差拡大へ突き進んでいっているのか。仏教、イスラーム、キリスト教にみられる功徳や喜捨や、原罪という設定から生まれる贖罪の思想と、これによっ

て構想される社会の姿をとおして、現代社会とこれを支える私たちの知を問い直してみたいと思います。

本書は、二〇一七年六月から七月はじめにかけて、毎週土曜日の午前、愛知大学豊橋校舎行でおこなわれた、愛知大学人文社会学研究所主催の公開講座「功徳と喜捨と贖罪－宗教の政治経済学－」での講演内容を収録したものです。各報告の最後におこなわれた、来場者による質疑とこれに対する応答は、本稿を作成する際に、本文に盛り込みました。